目　次

略　伝……1
一　はじめに――「註釈は最初のものであつて、同時に最後のものである」　1
二　その生涯　3
三　略年譜　6
第一章　さまざまな創作――短歌、小説、随筆……13
第二章　教育者として、編集者として……27
第三章　三大歌集の「評釈」の達成――『古今集』『新古今集』を中心に……65

第四章　「評釈」の可能性と拡がり——注釈と近代国文学研究……109
まとめに代えて　147
主要参考文献　151
図版出典一覧　156
後　記　157

略　伝

一　はじめに――「註釈は最初のものであつて、同時に最後のものである」

窪田空穂（くぼたうつぼ）は、近代を代表する歌人の一人として著名である。近年でも、短歌誌で空穂生誕一四〇年・没後五十年の特集[1]が組まれている。また空穂の第一詩歌集『まひる野』の注釈が、「和歌文学大系」の一冊として刊行されている[2]。

同時に空穂は、研究者として、国文学研究において、特に和歌文学研究において、実に大きな功績を残した。現在の研究書・論文においても、空穂の研究、特にその和歌の評釈を中心とした研究業績の内容は、しばしば引用されている。それは単に歌人の感性による鑑賞というレベルのものではなく、文化史的な目配りの上に、作品・作家の本質的な把握をしようとしたもので、今なお輝きを失わない。

空穂は、「註釈は最初のものであつて、同時に最後のものである」と、昭和七年（一九三二）刊『新古今和歌集評釈』上巻の「序」で述べている。これは古典文学研究における注釈の重要性を端的に示す言葉であり、現在も私たち研究者が、注釈について述べる時によく使う言である。空穂ほど、この言葉を身をもって実行した人はいないだろう。

図１　窪田空穂肖像写真

本書では、こうした空穂の足跡を辿りながら、近代国文学研究における空穂の位置と達成を考える。和歌文学研究だけではなく、散文の古典文学研究についても多く取り上げていきたいと思う。空穂は古典文学に対して、当初は和歌ではなくむしろ散文作品から興味を抱いて、古典文学の評釈・研究に入っていった。

私は現在早稲田大学の教員であるが、出身大学も年代も異なっているので、窪田空穂の謦咳に接したことはない。早稲田出身者には、藤平春男、松野陽一という中世和歌の研究者がおられ、両氏とも鬼籍に入られてしまったが、藤平春男は空穂の晩年に直接教えを受け、その後空穂の弟子岩津資雄（いわつもとお）に師事し、松野陽一も岩津資雄の弟子であった。私はその両氏から学恩を受け、また早稲田大学の同僚や出身者などから空穂に関わる話を少し聞いたことがあるというような、ごく間接的な繋がりしかない。このような私が、どれだけ窪田空穂に迫っていけるのか全くわからないが、むしろ少し離れた立場から、残されている文献資料・文字資料だけをもとにして――もちろんそれも空穂の真の姿をそのまま語るものではないかもしれないが――、はじめに空穂の生涯の事蹟を粗々辿った上で、近代国文学研究における業績と達成について、空穂の著を引用しながら、できるだけ具体的に考えていきたいと思う。

二　その生涯

窪田空穂（本名：窪田通治）の著述・資料は、長命であったこともあり、厖大に存在しており、その多くは『窪田空穂全集』[3]（以下、『全集』と称する）に収められているが、未収のものも少なくない。

その生涯を語る主なものとしては、まず、空穂自身がその半生と文学を語った「わが文学体験」（一九六五年、『全集』第六巻、のち岩波文庫）、および『日本経済新聞』に連載した「私の履歴書」（一九六六年、『全集』別冊）がある。ほかにも多くの随筆等で自身について語っており（『全集』第五・六巻、ほか）、そこから二十九編を選んだ大岡信編『窪田空穂随筆集』（岩波文庫、一九九八年）がある。また刊行した歌集ごとに回想して記した「歌集について思い出す事ども」（『全集』第一～三巻）がある。年譜はいくつか作られているが、最も詳しいものが『全集』の別冊にある。これらが空穂の伝に関してよるべき基本的な資料となるであろう。一方、子息である窪田章一郎をはじめ、多くの知友・弟子・門人たちが空穂について著した研究書・著作・エッセイ等が多数刊行されており、空穂の人間像についてもさまざま語っている。これらについては随時紹介・引用していきたい。

以上のように、空穂の略伝については多くの書籍がすでにあるため、ここでは主として空穂自身の著や言葉によりつつ、簡単に述べる。なお、年齢の表記については、空穂自身が「わが文学体験」では数え歳で記しており、「窪田空穂年譜」（『全集』別冊）も数え歳で掲げているので、それに従った。また以下、原則として漢字は通行の新字体で記した。

空穂は明治十年（一八七七）に長野県東筑摩郡和田村（現松本市和田）の自作農（中産）の家に生まれた。父は庄次郎（寛則）四十二歳、母ちかは四十歳。兄は二十一歳になっておりこの年結婚。母は次男で末子の空穂を「酷愛したのである」（「わが文学体験」）。松本高等小学校（現開智小学校）を卒業後、松本尋常中学校（現松本深志高等学校）に入学した。文学書に親しみ、東京に憧れ、明治二十八年（一八九五）三月、十九歳で中学校五年卒業後、八月に家族に無断で上京し、東京専門学校（現早稲田大学）の補欠試験を受けて文学科に入学した。しかし周囲を見て自分の能力について自信を喪失し、翌年夏に退学した。その後は一時実業界に進むことを志し、大阪堂島の米穀仲買業（投機商）の店で働くが、翌三十年に郷里に帰り、母と父の死去の後、明治三十二年に小学校の代用教員となった。

図2　窪田空穂の生家

明治三十三年（一九〇〇）、二十四歳の時、兄の勧めがあり九月に上京して東京専門学校文学科に再入学した。在学中は特に坪内逍遙（つぼうちしょうよう）の授業から感銘を受けたという。この頃作歌にいそしみ、与謝野鉄幹（よさのてっかん）・晶子（あきこ）の新詩社に加わるが、約一年後に離れた。明治三十七年（一九〇四）七月に東京専門学校（翌年早稲田大学と改称）を卒業、電報新聞社の社会部記者となった。そして翌三十八年には、第一詩歌集『まひる野』を刊行した。この頃、植村正久（うえむらまさひさ）の教会に通い、植村から大きな影響を受けたと、何度も自身で語っている。

以後、独歩社、東京社、女子美術学校教員など、転職を重ねて生活を支えながら作歌を続け、短歌・詩を次々に発表、同人雑誌・機関誌を編み、短歌欄選者にもなる。一方で、十六年間に一〇〇編以上の短編小説を著し、それは明治四十一年（一九〇八）頃がピークであったが、明治末頃には小説の執筆はほぼなくなり、再び短歌へ関心が戻り、作歌活動は生涯続いた。ほかに随筆、紀行文などの著作も多い。その傍ら、古典文学についても、明治四十一年頃から『万葉集』『金槐和歌集』や香川景樹（かがわかげき）、『伊勢物語』『源氏物語』などについての文章や評釈を発表し始めている。

この頃の古典の著書としては、大正元年（一九一二）に『註解古今名歌新選』『評釈伊勢物語』、同四年に『万葉集選』『続万葉集選』『奈良朝及平安朝文学講話』、同五年に『枕草紙評釈』（全釈ではなく前半のみ）、同六年に『西行景樹　守部』『万葉集選』（前二著の合本）などを刊行した。

大正九年（一九二〇）に大きな転機が訪れた。前年に新大学令にもとづき早稲田大学文学部に国文学科が創設され、その専任講師として招かれて、大学の教壇に立つことになったのである。時に四十四歳。これは、坪内逍遙が空穂の『奈良朝及平安朝文学講話』（『万葉集』論と清少納言論）を読み、評価したことによるという。

以後さらに古典の評釈に打ち込み、『新古今和歌集評釈』『古今和歌集評釈』『万葉集評釈』を次々に刊行し、前人未踏の三大歌集の全評釈をなし遂げ、しかもそれを長年にわたり改訂し続けた。これだけではなく、『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』、中世和歌・歌論、近世和歌など、幅広く古典文学の研究・評釈・現代語訳などを行い、多大な業績を残した。これらについては、第三章、第四章で述べることとする。

第一章、第二章では、以上のような空穂の創作と軌跡をめぐって、網羅的ではなく、いくつかの視点から、やや

詳しく取り上げていく。

簡単な略年譜を次に掲げる。詳しい年譜は『全集』別冊所収「窪田空穂年譜」をご覧いただきたい。

三　略年譜

明治一〇年（一八七七）　六月八日、長野県東筑摩郡和田村（現松本市和田）に生まれる。本名は窪田通治（つうじ）。父庄次郎（寛則）、母ちか。次男で末子。

明治二三年（一八九〇）　松本尋常中学校（現松本深志高等学校）入学。文学に親しむ。

明治二八年（一八九五）　八月、家人に無断で上京。九月、東京専門学校（現早稲田大学）文学科の補欠試験を受けて入学。

明治二九年（一八九六）　夏、学力不足を感じて退学。

明治三〇年（一八九七）　六月頃、帰郷。八月、母没す。

明治三一年（一八九八）　冬、父の意向に従い、村上家の一人娘と結婚、聟養子となる。

明治三二年（一八九九）　九月、父没す。村上家と離縁。秋、小学校の代用教員となる。太田水穂（おおたみずほ）と知り合い、作歌をするようになる。

明治三三年（一九〇〇）　与謝野鉄幹選の『文庫』に投稿。九月、上京して東京専門学校文学科に再入学。鉄幹に会

い新詩社に入る（約一年間）。

明治三七年（一九〇四）　東京専門学校卒業。七月、電報新聞社の社会部記者となる。その後出版社・新聞社等、次々に転職。植村正久の柳町教会に通うようになり洗礼を受ける。

明治三八年（一九〇五）　第一詩歌集『まひる野』（鹿鳴社）刊。

明治三九年（一九〇六）　第二歌集『明暗』（水野葉舟と共著。金曜社）刊。

明治四〇年（一九〇七）　亀井藤野と結婚。

明治四一年（一九〇八）　『新派短歌評釈　附作法』（玄黄社）刊。この頃、小説の執筆を盛んに行う。長男章一郎生まれる。

明治四三年（一九一〇）　この頃、国文学の評論増加する。

明治四五・大正元年（一九一二）　第三歌集『空穂歌集』（中興館書店）刊。『註解古今名歌新選』（博文館）刊。『評釈伊勢物語』（中興館書店）刊。

大正三年（一九一四）　一般文芸誌『国民文学』創刊。田山花袋、徳田秋声ら寄稿。『源氏物語』（梗概本。実業之日本社。後に河野書店）刊。

大正四年（一九一五）　第四歌集『濁れる川』（国民文学社・抒情詩社）刊。『万葉集選』『続万葉集選』（日月社）刊。『奈良朝及平安朝文学講話』（文学普及会）刊。

大正五年（一九一六）　第五歌集『鳥声集』（日東堂）刊。『読売新聞』の身の上相談を担当。『枕草紙評釈』（前半のみ。日東堂）刊。

大正六年（一九一七）　『西行　景樹　守部』（白日社出版部）刊。四月、妻藤野死去。五月、読売新聞社を辞職し、帰郷。『万葉集選』（前二著の合本。越山堂）刊。十月、藤野の妹である亀井操と再婚。上京し、雑司ヶ谷に住む。

大正七年（一九一八）　第六歌集『泉のほとり』（東雲堂書店）刊。次男茂二郎生まれる。第七歌集『土を眺めて』（国民文学社）刊。

大正九年（一九二〇）　『朝日新聞』短歌欄の選者となる。第八歌集『朴の葉』（東雲堂書店）刊。前年に新大学令により早稲田大学文学部に国文学科が創設され、四月、その専任講師となる（四十四歳）。

大正一〇年（一九二一）　第九歌集『青水沫』（日本評論社出版部）刊。『万葉集選釈』（早稲田大学出版部）刊。

大正一四年（一九二五）　『紀貫之歌集』（紅玉堂書店）刊。

大正一五・昭和元年（一九二六）　四月、早稲田大学教授となる（五十歳）。歌誌『槻の木』を創刊。第十歌集『鏡葉』（紅玉堂書店）刊。

昭和二年（一九二七）　『和文和歌集』上巻（日本名著全集刊行会）刊。

昭和三年（一九二八）　『和文和歌集』下巻刊。操と離婚（操は昭和五年に死去）。

昭和四年（一九二九）　第十一歌集『青朽葉』（神谷書院）刊。『江戸時代名歌選釈』（理想社）刊。

昭和五年（一九三〇）　中島銈子と再婚。

昭和七年（一九三二）　『新古今和歌集評釈』上巻（東京堂）刊（上下とも、全釈ではなく約半数の歌の選釈）。

昭和八年（一九三三）　『新古今和歌集評釈』下巻刊。

昭和九年（一九三四）　第十二歌集『さざれ水』（改造社）刊。

昭和一〇年（一九三五）　『柿本人麿』（非凡閣）刊。『古今和歌集評釈』上巻（東京堂）刊。

昭和一一年（一九三六）　『現代語訳源氏物語』（上巻のみ。非凡閣）刊。

昭和一二年（一九三七）　第十三歌集『郷愁』（書物展望社）刊。『古今和歌集評釈』下巻刊。

昭和一三年（一九三八）　『西行法師』（厚生閣）刊。

昭和一四年（一九三九）　『江戸時代名歌評釈』（非凡閣）刊。『現代語訳源氏物語』一・二（改造文庫）刊（以後も毎年継続して刊行し、昭和十八年に八「柏木」までで中絶）。

昭和一六年（一九四一）　第十四歌集『冬日ざし』（砂子屋書房）刊。日本芸術院会員となる（六十五歳）。

昭和一七年（一九四二）　『近世和歌研究』（砂子屋書房）刊。短歌読本『柿本人麿』（新声閣）刊。

昭和一八年（一九四三）　『万葉集評釈』第一巻（東京堂）刊（以後も継続して刊行し、昭和二十七年に第十二巻をもって完結）。『中世和歌研究』（砂子屋書房）刊。『愛国百人一首』（開発社）刊。学徒動員始まる。

昭和一九年（一九四四）　大学は休講状態となり、『万葉集評釈』に没頭。

昭和二〇年（一九四五）　第十五歌集『明闇（あけぐれ）』（青磁社）刊。疎開先の軽井沢で敗戦をむかえる。

昭和二一年（一九四六）　第十六歌集『茜雲』（西郊書房）刊。『平安朝文芸の精神』（西郊書房）刊。

昭和二二年（一九四七）　『現代語訳源氏物語』第一巻（改造社）刊（完訳本。以後も毎年継続して刊行し、昭和二十四年に第八巻をもって完結）。次男茂二郎がシベリアで戦病死との報を受ける。百花文庫『和泉式部』（創元社）刊。

昭和二三年（一九四八）　早稲田大学を定年退職、名誉教授となる。
昭和二六年（一九五一）　第十七歌集『冬木原』（長谷川書房）刊（茂二郎を悼んで詠んだ長歌「捕虜の死」を含む）。『窪田空穂著作集』（ＰＬ出版社）刊行開始（昭和三十二年に第十三巻をもって完結）。
昭和二七年（一九五二）　『古典文学論』（創元社）刊。
昭和三〇年（一九五五）　第十八歌集『卓上の灯』（長谷川書房）刊。『伊勢物語評釈』（東京堂）刊。
昭和三一年（一九五六）　『源氏物語』（口語訳梗概。春秋社。昭和三十七年に普及新版）刊。『万葉秀歌』上下（春秋社）刊。
昭和三二年（一九五七）　第十九歌集『丘陵地』（春秋社）刊。『平安秀歌　前期』（春秋社）刊。
昭和三三年（一九五八）　『窪田空穂文学選集』（春秋社）刊行開始（昭和三十五年に第八巻をもって完結）。日本古典全書『和泉式部集　小野小町集』（朝日新聞社）刊。『万葉秀歌　長歌』（春秋社）刊。文化功労者となる（八十二歳）。
昭和三五年（一九六〇）　『古今和歌集評釈』上中下巻（新訂版。東京堂）刊。第二十歌集『老槻の下』（春秋社）刊。
昭和三八年（一九六三）　早稲田大学から名誉博士号を贈られる。
昭和三九年（一九六四）　『完本新古今和歌集評釈』上中巻（東京堂）刊。『芭蕉の俳句』（春秋社）刊。第二十一歌集『木草と共に』（春秋社）刊。
昭和四〇年（一九六五）　『完本新古今和歌集評釈』下巻刊。『窪田空穂全集』（角川書店）刊行開始。「私の履歴書」執筆。

昭和四二年（一九六七）　第二十二歌集『去年の雪』（春秋社）刊。四月十二日、心臓衰弱のため死去（九十一歳）。早稲田大学大隈講堂で葬儀、告別式。

昭和四三年（一九六八）　第二十三歌集『清明の節』（春秋社）刊。『窪田空穂全集』が別冊「窪田空穂資料」をもって完結。

平成五年（一九九三）　松本市和田の生家前に窪田空穂記念館が開館。

（1）「大特集　いまこそ空穂」（『短歌』第六十四巻第六号、角川文化振興財団、二〇一七年五月）。

（2）「和歌文学大系79」の『まひる野／雲鳥／太虚集』（明治書院、二〇一七年）。『まひる野』は太田登校注・解説。

（3）『窪田空穂全集』全二十八巻・別冊（角川書店、一九六五～六八年）。

第一章　さまざまな創作——短歌、小説、随筆

「窪田空穂」という雅号

最初に「空穂」という雅号について触れておこう。これについては、空穂自身が「雅号の由来」(『全集』別冊)で述べている。郷里にいた二十一歳の頃、『文庫』という青年の投書雑誌に投稿する時に、ふと思い浮かんだ「空穂」という雅号を用いたのが最初であるが、当時は文学に親しみを持つ者は皆雅号を持っていたという。これを「うつぼ」と読むことは、空穂の最初の詩歌集『まひる野』(一九〇五年)の表紙に「窪田うつぼ著」としていることから知られる。

図3　『まひる野』

空穂は早稲田大学では、本名の「窪田通治」教授であった。「窪田通治」と「窪田空穂」とは、意識的な使い分けがなされているのだろうか。たとえば折口信夫(おりくちしのぶ)は、基本的に、学問的な著述には「折口信夫」を、詩歌などの創作には「釈迢空(しゃくちょうくう)」を用いた。けれども空穂の場合は、『まひる野』で、表紙には「窪田うつぼ著」としているが、扉と内題には「窪田通治」としているから、当初から厳密に区別して用いる意識は特になか

ったのではないか。その後の歌集や歌誌でも「窪田通治」を用いている場合がある。また早稲田大学出版部から刊行された、『万葉集講義』(尾上八郎『短歌講義』と合綴)『万葉集選釈』『早稲田大学文学講義』などは、大学での名を用いて「窪田通治」としているが、一般の出版社から刊行された評釈・研究の類は「窪田空穂」であり、名前の付け方で研究と創作を峻別しているわけではないようだ。

歌人としての生涯

空穂は、和田村で小学校の代用教員をしていた時、一歳上の太田水穂から刺激を受けて、作歌をするようになった。第一詩歌集『まひる野』を出したのは明治三十八年(一九〇五)であり、昭和四十二年(一九六七)に逝去する直前まで作歌を貫いた。歌集は二十三冊。歌集に収載されたものだけで、短歌が一万三〇〇〇首余、長歌が一四一首に及ぶ。七十代、八十代になってもその作歌は衰えをみせていない。

空穂は、明治末から大正期には小説に関心が移り、明治四十五年(一九一二)の『空穂歌集』刊行について、「今後作歌はやめようと思い、記念としようとしての刊行であった」(「わが文学体験」『全集』第六巻)と述べている。しかしやがて小説の執筆はしなくなり、短歌に戻っている。早稲田大学の教壇に立つようになってからも、作歌活動は飽くことなく続けており、早稲田大学でも多くの歌人を育てた。晩年は円熟して独自の透徹した歌境に至ったということを、多くの人が述べている。

雑誌創刊においては、明治三十五年(一九〇二)、東京専門学校在学中に友人たちと同人雑誌『山比古』を創刊、空穂は短歌や短編小説「下男」などを次々に発表したが、同三十七年に廃刊した。大正三年(一九一四)に一般文芸

誌『国民文学』を創刊したが、同六年には松村英一に譲った。『国民文学』から分かれたものに『沃野』がある。早稲田大学では、早大学生を中心とする槻の木会から、昭和元年（一九二六）に歌誌『槻の木』が創刊され、そこで数多くの門人を育てた。このほかにも空穂ゆかりの歌誌は多くある。

本書においては、空穂の歌人活動や短歌などについては、少しを取り上げるに留めているので、空穂の歌について論じている数々の本や論、たとえば窪田章一郎、大岡信、武川忠一、岩田正、西村真一、来嶋靖生、その他、諸氏の編著を参照していただきたい。(1)

空穂は文壇での交友範囲を自分でさらに広くしようとは特にしていないようで、文壇で一躍有名になろうというような強い名誉欲はなかったのではないか。与謝野鉄幹・晶子とは当初から関わりがあったが、国木田独歩、田山花袋とも交友があり、晩年には土岐善麿と親しくなった。早稲田では同僚の五十嵐力、山口剛、会津八一と親しく交友したという。晩年には空穂を敬愛する人は多かった。しかし、空穂自身が歌友は多くないと言っており、さほど文壇・歌壇からの影響は受けず、何よりも自分の方法や感性、姿勢を大切にしていくことを重んじたとみられる。では次に、鉄幹について述べておこう。

与謝野鉄幹との関係

当初、太田水穂は空穂の歌をあまり高く評価しなかったらしい。そこで空穂は明治三十三年（一九〇〇）の春、新たに与謝野鉄幹が選者となった『文庫』に試みに短歌を投稿したところ、鉄幹はそれを激賞し、全部が掲載された。この時、空穂は「小松原はる子」という女性名で投稿している。空穂自身は「歌稿を清書して、署名をする段にな

り、本名を書くのはなんとなく気恥ずかしい気がして「小松原はる子」とした。でたらめの名で、他意あってのことではなかった」(「わが文学体験」)と述べている。確かにこれらの歌には作者が女性ともとれるような趣があり、また浪漫的・抒情的な雰囲気が漂う。

これらの歌は、その四月に創刊された鉄幹の『明星』にも転載された。鉄幹はこれ以前に作者がだれかを知り、この時には「窪田通治」としてある。空穂は、この明治三十三年、上京して東京専門学校に再入学したのを機に、鉄幹に慫慂されて新詩社に加わった。しかし翌年秋には新詩社から遠ざかった。その後も交友は続いてはいたものの、明星派としての活動は約一年に留まっている。同三十八年、空穂は五年間に創作した詩歌を編集して、処女詩歌集『まひる野』を刊行した。そこでは『明星』掲載歌の八割を棄てている。

『まひる野』の刊行後、鉄幹はすぐに『明星』に『まひる野』評を載せて、長文で賞讃し、空穂も喜んだ。鉄幹は空穂の歌才を発見した人であり、空穂の恩人の一人でもある。空穂は鉄幹に、生涯を通じて敬意をもっていたと言っている(「歌集について思い出す事ども」『全集』第一巻)。けれども、「わが文学体験」で、鉄幹とのいきさつなどを長く書いている中で、「私には新詩社の人は距離ある存在であった。胸を披(ひら)いて交われるような人はそこからは見出だせなかった」と言う。おそらく、自己陶酔的な歌風の新詩社とは、空穂は基本的に相容れぬものがあったのだろう。

後年になって空穂は鉄幹のことを、

与謝野という人は、歌はうまかったし、技巧でいえば、すばらしい技巧を持っていた人だった。ただ、恋愛と

功名、それを少しくり返しすぎた。少し野心が強すぎた。自分の吹聴をしすぎた。

（空穂談話Ⅲ「与謝野鉄幹・晶子のこと」「窪田空穂全集月報3」第八巻付録、一九六五年五月）

と語っている。何と率直で端的な批評であろうか。

小説・随筆・紀行文

空穂は、明治三十～四十年代に、自然主義文学に影響を受け、一時、関心が歌から離れて、小説に興味が移った。「わが文学体験」（『全集』第六巻）から少し引用しよう。

当時は文壇の主流である小説界は、自然主義の勃興期であった。論議の時期が過ぎて実作期に移っていた。（中略）小説は客観的に扱って、叙事としているのを、短歌は主観的に抒情（じょじょう）とし、また形式の関係からは断片的に扱っていることが異なっているに過ぎない。自身に即しつつ客観視するということは容易（たやす）くなかろうが、これは修練すれば次第にできるようになろう。（中略）私は短編小説を書くたびに前田（まえだ）に示した。『文章世界』に載った。「母」「末っ子」などその中のもので、見こみがなくはないといわれた。

前田とは、空穂の生涯の親友前田晃（あきら）であり、当時『文章世界』（田山花袋が編集主任）の編集助手であった。

空穂は、処女作「下男」（一九〇三年）以降、大正八年（一九一九）まで、十六年間に一〇〇編以上の短編小説を書い

ている。多くは生まれ故郷のような農村の生活、そしてそこでの人間関係を題材としており、暗い色彩のものが多いが、冷静な筆致の淡々とした文章で、心理描写に優れ、暗いながらも澄んだ感じを受ける。明治三十年代後半〜四十年代は多作で、四十二年頃を頂点とし、四十四年には書いた小説を集めて自費出版で『炉辺』(村瀬書院)を刊行した。が、明治末頃には小説の本格的な活動は終わり、再び短歌へ関心が戻っていく。このほか、随筆、紀行文などの著作も多くあり、それはずっと書き続けられていて、深い味わいと静かな風韻がある。空穂の文章は概して平明で短く飾り気がないが、深く凝縮されていて、おそらく短歌での修練が反映されている面もあるのであろう。

また、小説家としての経験や鍛錬は、古典の物語、日記などへの関心を惹起したのではないだろうか。その端緒として、明治四十三年(一九一〇)に『伊勢物語』『源氏物語』『十六夜日記』についての文章が『文章世界』十一月号に書かれた。同四十五年には『評釈伊勢物語』が刊行されている(一一〇頁参照)。

最初の妻の影

ところで、空穂の小説の中には、故郷にいた頃の自分に関する自伝的な色彩のものがいくつかある。「養子」(『全集』第五巻)、「無言」(『炉辺』所収、『全集』第四巻)などである。大岡信『窪田空穂論』がこれらに注目して、推定を加えている。この頃、空穂が「過去の行動の自責に囚えられ、それが前途を遮る壁でもあるかのような情を抱いていた」(「私の履歴書」)と述べているのは、空穂がごく若い頃、結婚してまもなく捨てた最初の妻とのことをさしている、という推定である。これは確かにその通りであると思われる。

『全集』別冊の「窪田空穂年譜」や、窪田空穂記念館編『窪田空穂——人と文学』所収の「窪田空穂略年譜」な

ど、すべての年譜には、明治三十一年（一八九八）、二十二歳の時に「村上家と養子縁組」と書いてあるが、より詳しくは、村上家の一人娘であるキヨと結婚して聟養子となったのである。

空穂自身は、昭和四十年（一九六五）、最晩年の八十九歳になってから、「私の履歴書」でその経緯について書いた。また同三十四年に書かれた「わが家の出自を語る」（『全集』第十二巻）でも少しだけ触れている。それによれば、明治三十一年、「その年の冬、足入れ（仮り結婚）、翌年の春、村への披露があつて、私は正式に村上家の者となつた」とあり、正式に結婚披露をしたことがわかる。半年ほど聟として村上家に住んだが、その家の家風に、そしておそらくは聟という立場に堪えきれず、離縁に至ったのだろう。これらの文章で「妻」と呼んでいることからも、これが最初の結婚であったことは明らかである。この妻の影は、空穂の初期の歌にもかなりあらわれている。明治三十三年、『明星』に掲載された歌には、明星的な浪漫的表現は取りつつも、実に重苦しいものがある（『全集』第三巻）。

いたましき思出のみをさづけてはえにしの神の隠れ給ふか　（『明星』七号）

かがなへば既に五つとせ新しきなげき抱きて君も世に生（い）く　（同）

とがあらば我れ責めたまへ國つ神なみだあらせじと思ふ子なるに　（『明星』八号）

これらの歌や、『まひる野』の「あこがれ」の最後に置かれた十数首は、虚構を加えながらも、この妻との別離をテーマとした歌群であること、『まひる野』の「おもかげ」などの詩にもこの妻の影があることを、武川忠一『窪田空穂研究』（注（1）参照）が読み解いていて、大変興味深く、参照していただきたい。

その後の邂逅

この女性（村上キヨ）のその後については、空穂も子息章一郎も何も述べていないので、その後どのような生涯を送ったのだろう、と思っていたのだが、それについて述べている文章をたまたま見出したので、ここに記しておきたい。

それは『信濃教育』第一一二八号（「特集窪田空穂」一九八〇年十一月）所載の、村上与八郎による「吾が家の歌碑」である。これは昭和三十七年（一九六二）に与八郎の父村上修が空穂の歌碑を庭に建立した際の話であり、その仲介をしたのが隣家出身の村上俊順（昭和五十五年に他界）であったという。その文章の一部を引用する。

ではここで空穂先生と村上俊順氏との関係を差しつかえのない範囲内で亡父より聞いて居ります事を概略書いてみることにします。

私宅の西隣に二十数本の欅の大木を垣根代わりにして居りました同姓の地主階級の家の一人娘の養子に参られたのが、当時二十才位であった窪田通治さんなる青年であったのであります。どの様な経緯で養子に参られたのかは知りません。父も知らぬ様でした。養子を迎えた娘がその頃、片丘村は無論のこと近在の村々にも二人とは居ないではないかとまで世間に名の知れた大変な美貌の娘であったとのことです。資産は村内で指折り、その上天女のようなあの娘にはどの様な養子が来るのやらと村内のうわさ話の種にもなり、且羨望の目を以て期待していたところ、和田村の名門の出身であり又この地方では珍しい松本中学校を卒業されている等々、加

えて仲々の美青年であったとの事で、本当に似合いの若夫婦であったとの事でした。しかしこの結婚生活もわずか一年足らずで離婚という破局を迎えねばならなくなりました。その真の原因が何であったのか父もよくは知らない様でした。（中略）

隣家では空穂先生が去られた後、再度養子を迎えられ二男一女が生まれ、その長男が俊順氏で松本中学校より早稲田大学予科、本科と進み、国文科に籍をおいて勉学する事となりました時に、国文学の教授として教えて下さったのが空穂先生であったとの事でした。

先生の方から俊順氏に「君の母の許に養子に行った事もあったが」などと話しかけられ、以来実の親子の如き感情で師弟の交りを結び、交際して参り、俊順氏も万葉集の校正その他の仕事には寝食を忘れて尽力された様でした。

空穂先生の長男であります章一郎先生も俊順氏とほぼ同年輩で共に早大の国文科に学ばれ、兄弟の如く永年に及んで交際を続けられたとの事です。（中略）

空穂先生のご他界の後、程なくして父も世を去りました。其の後数年ほどしたある年の秋、章一郎先生が早大の教え子でありました当地の牛伏寺の若住職の案内で訪ねてくれました。

この村上俊順は、窪田章一郎『西行の研究』（東京堂出版、一九六一年）の「あとがき」に、校正等の協力者の一人として、藤平春男らとともに名前が見えている。若い頃の空穂を自責の念で苦しめた結婚破綻という出来事の後、その女性が再婚し、はからずもその女性の長男である村上俊順に早稲田大学で邂逅し、師弟関係を結ぶという関わ

りをもったわけである。このことは、空穂にあるやすらぎをもたらしたのではないだろうか。

藤野への哀傷の歌、哀傷の記

さて、明治四十年(一九〇七)、空穂は元教え子の亀井藤野と結婚、十年間の幸せな結婚生活を送った。しかし藤野は、大正六年(一九一七)四月に二児(章一郎とふみ)を残して三十歳の若さで死去した。同七年十二月に刊行された空穂の歌集『土を眺めて』(『全集』第一巻)は、多くの長歌と短歌から成る、藤野への哀切な追悼歌集である。空穂は、藤野が没した半年後の同六年十月に、亀井家の希望で藤野の妹である操と再婚し、翌七年六月には次男茂二郎も誕生しているのだが、空穂から藤野への想いはやむことなく歌に詠まれている。なお操とは十一年後の昭和三年(一九二八)に離婚し、操はその二年後に死去した。

『土を眺めて』の中に、このような歌がある。

其子等に捕へられむと母が魂螢と成りて夜を來たるらし

この歌には、おそらく和泉式部の「物思へば沢の螢もわが身よりあくがれいづる魂かとぞ見る」の影響がある。古典和歌において「螢」と「魂」の組み合わせは一般的ではなく、あまり詠まれないが、この和泉式部の歌は人口に膾炙し、古くから愛されている歌である。空穂自身も和泉式部の歌を好んだ(後述)。和泉式部の歌一一一首を選んで鑑賞を加えた百花文庫『和泉式部』(創元社、一九四七年)――小冊子ながら大岡信は名著として高く評価している――があり、そこで空穂は最後にこの歌を取り上げている。空穂は概して古典和歌からの措辞の摂取については